

バリの歌舞劇アルジャにおけるパフォーマンス生成--類型性と多様性の考察 増野 亜子

バリ島の伝統的な歌舞劇アルジャ arja、とくに専門的な役者によるアルジャ・ボン arja bon は即興性の強い芸能である。集団即興によるパフォーマンス生成には、参加者の間にある種の規範の共有が不可欠であると考えられるが、演者たちはこうした規範を体系的に認識してはいない。そのため即興表現の基盤となる暗黙のきまりごとを「表現規範枠」とよぶことにする。

パフォーマンス生成において演者は、複数のレベルで機能する多様な規範の枠内に収まるように表現を選択する。例えばアルジャには常に同じ役割、名前、性質、表現形態等によって表現される類型的登場人物群があり、役者は各役柄にふさわしい表現の内容と形態を選択しなければならない。さらに王族役の台詞にはモチャパット mocapat と呼ばれるきまった韻律と旋律があり、従者役の冗談は笑いをめぐる繊細な美学によって統制されている。規範の共有は結果としてパフォーマンス間の類型性をもたらし、複数のパフォーマンスをつなぎあわせる。それによってアルジャは独自の物語世界と表現様式をもつことができ、観客は多様なパフォーマンスを、その差異を超えて「アルジャとして」理解することができるのである。

一方アルジャにおいては、多様性や流動性を高く評価する美学が、演者と観客の双方に共有されている。そのため表現規範枠の内には多様な選択肢があり、演者は場面や状況に応じて流動的に表現を変える。規範は表現を拘束するというより、即興を支え導いている。つまりアルジャにおいて表現の多様性と類型性は相互依存的なものであり、規範枠の存在はその対照的な二つの力を調整することによって、アルジャがアルジャとしてのアイデンティティを維持しながら、一方で多様な表現を生み出すことを可能にする仕掛けであるといえるだろう。